

午後の部 フォーラム「学校保健委員会が学校、そして地域を変える」

～つながろう、ひろげよう、ふかめよう～

(1) パネリストによる発表・提案の後、(2) 5～6名の班にわかれグループ協議を行い、話し合われた内容についてフロアからの声を出し、最後に(3) 指導助言者よりアドバイスをいただくという形式で進行されました。

1 全校でのぞむ校内学校保健委員会

(1) パネリストによる発表「十人十色な七中の子～人を理解することってどういうこと～」

(静岡市立清水第七中学校 本間江理子養護教諭)



核となり・・・生徒間の誹謗中傷、見下し言葉(「死ね」「キモい」「ウザい」)がとびかっている現状。生徒会の「いじめ0宣言」は理念のみが残形骸化。真の「いじめゼロ」を実現することが私の願いとなった。

巻きこみ・・・保健専門委員長は学校保健委員会の場合、全校生徒の前で、私の願いを熱く語った。開会メッセージで「いじめから目をつぶることも逃げることもしません」と。自分の同志となっていると感じた。

渦と為す・・・同志である保健主事、保健専門委員長を中心とした活動から、生徒会を主体とした活動および全校道徳へと広がりを見せた。

(2) グループ協議→話し合いの内容発表

- ・養護教諭のあふれる思いが教員に伝わり、同じ思いで関わっている。
- ・3年間同じテーマで継続しているの、学びが多い。
- ・委員長との関りが大切と感じた。

(3) 指導助言(静岡市教育委員会大澤京子指導主事)

テーマを決めた時、学校全体が自分のものと自覚することが大切。そのために養護教諭は、①心からこみあげてくる思いを切々と語る、②同僚性を重視するとよい。養護教諭が日ごろ、児童生徒とどのくらいの距離感にいるか、養護教諭の専門性が教諭の信頼感につながり、「この人についていきたい」と感じさせる。

2 校区合同で行う学校保健委員会

(1) パネリストによる発表「ぐっすりナイトで、生き生き生活～メディアを考えよう～」

(沼津市立愛鷹中学校 塚本あかね養護教諭)

- ・校区合同の学校保健委員会を10年以上継続している。年間計画を3校協力して作成し、年度初めに各校の職員会議で伝えている。
- ・3校で共通した健康課題を見つけ、3人の養護教諭で子供への願いについても確認する。(実践発表は、メディアと夜食に焦点を当てた時のもの)



3校が連携し継続することで「メディア1時間以内率」がUP!

(2) グループ協議→話し合いの内容発表

- ・学校保健委員会は単発で終わりがち。積み重ねが大切。
- ・小中合同でやりたくても日程を組むのが大変。よい方法はないか?
- ・保護者の参加を増やすよい方法は?

(3) 指導助言(浜松市教育委員会浅野慶子指導主事)

- ・教務部、事務部に話を通しておく、養護教諭だけががんばらなくてよい。
- ・保護者の参加を増やすためには、PTAから呼びかけてもらったり、参観会・懇談会と併せて計画したりするとよい。

事例集 15 編集委員会によるVTR「ビジネスマナー」の講座も開かれました

養護教諭は組織の一員として仕事をしている。好感をもてる、信頼される仕事をするのが大切である。マナーは形だけでなく、心をこめて行うことで信頼関係を築くことができる。

講師を学校にお招きする際のビジネスマナー

たとえば・・・当日、校長・事務室に事前に連絡をし、講師をお招きする際の役割分担をしておく、立て看板・スリッパを準備し、下駄箱には御名前をお書きし、歓迎の意を示すなど

3 外部と連携した学校保健委員会

(1) パネリストによる発表「生き生き宣言！～健康な生活について考えよう～」

(伊豆の国市立大仁中学校 宮崎典子養護教諭)

自分の生活を振り返り、主体的に健康づくりに取り組む児童を目指した。普段なかなか接することができない専門家の方との対話は子どもたちにとって貴重な経験となった。



講師依頼 市の保健師に相談し、保健師・管理栄養士などの派遣に繋がった。

グループ分け 児童を希望する7グループに分け、話し合いたい内容を調査した。

講師との事前打ち合わせ アンケート結果と児童の話し合いたい内容を伝えた。

当日の運営 話し合いのまとめで、今も将来も健康でいられるための健康宣言を作成し、全体で発表した。

事後の取組 お礼の手紙、学校からの礼状、保健便りを送付した。

<p>(2) グループ協議→話し合いの内容発表</p> <ul style="list-style-type: none"> 複数のテーマを設け、児童が自ら選ぶことで、児童が主体的に健康課題を捉えることができたのではないかと。 児童が校医等と関わる機会を設けることで、学校保健活動全体の活性化に繋がる。 	<p>(3) 指導助言（静岡県教育委員会松本美千代教育主幹）</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童の実態を掴んでおり、健康課題を自ら意思決定し、行動選択する力をつける取り組みであった。 学校医らは専門家だが、伝えることの専門家ではない。話し合いの内容を打合せで明確にしておくことが大切である。
--	--

4 地域につながる学校保健委員会

(1) VTRによる発表「地域と連携していくためには、何から始めたら良いだろうか？」

(増田みちよ元養護教諭)

①日々の保健室経営を大切にする

組織の一員として丁寧に生徒と教員を繋いでいくことが大切。保健室は健康・安全・安心の柱である。地域の方が来校した場合は、学校全体で対応する。

②健康課題を職員全体で理解する。

職員全体で健康課題として納得したものを全体で取り組むことが大切である。

③学校経営計画の柱として示される。

まずは健康・安全・安心に対して養護教諭がイニシアチブを発揮する土台を作る。子ども・保護者・教員を支えていくことで、支えられるようになる。



<p>(2) グループ協議→話し合いの内容発表</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒が主体的に参加していた。 長年の積み重ねが学校保健委員会の土台を作り上げている。 健康課題を教員が共通理解し、職員全体で取り組んでいる印象を受けた。 	<p>(3) 指導助言（静岡県教育委員会柿沼いずみ教育主幹）</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域は生徒の生活の場であり、地域との関係の安定が、生徒の安心感に繋がっている。 地域と連携するため、学校保健計画を保護者に周知し、組織的に取り組む必要がある。
---	--

総括 静岡大学教育学部教授 鎌塚 優子 氏による指導講評

- 養護教諭が「どんな子どもになって欲しいか」と熱い想いをもち、取り組んで欲しい。周りを動かす力は日々の保健室経営や子どもとの関わりなど信頼関係が基盤となっている。
- 「真実は多様である」とらえ方が偏ると、本質が大きくずれてしまう。本質に迫るためには、広い視野をもってダイバーシティの感性を高めることが重要である。
- 養護教諭は世界でも類を見ない日本独自の職業である。養護教諭の職務に誇りを持って実践を積み重ねて欲しい。